

やすらぎ

日本聖公会 九州教区 福岡聖パウロ教会
〒810-0045 福岡市中央区草香江 2-9-22
TEL 092-751-0097 FAX 092-751-9916
発行人 司祭 ミカエル 李相寅

257号

2021.10.10 発行

YASURAGI



「信仰によるやすらぎ」

イサンイン
司祭 ミカエル 李相寅

最近、韓国の私の家族から来る便りには、両親が病気がちで病院生活が増えていると、よく書かれています。このような便りに接すると、両親はもちろんですが、子供である私も心に痛みを覚えます。昔とは変わった両親の姿を想像すると、何だか心が憂鬱になって、悲しく息苦しくもあります。しかもコロナ禍のために直接会うこともできず、申し訳ない気持ちはどんどん大きくなっていきます。たまに家族との電話で慰め合ったり、両親が元気だった頃のことを思い出して笑ったり、力を出そうと誓い合ったりもします。

私たちはこのように、変化していく「自分」と「自分の周り」、そして「過去の記憶」とともに生き、しばしば過去の記憶を再確認して「安らぎ」を得ています。でも、この「安らぎ」は本物でしょうか。

仏教は、このような人の人生に解釈を与え、助言をしています。私はそれを、「たい焼き」という例で説明してみます。

「たい焼き」は「たい焼き」を作る「型」の中に「練り粉」を入れて作られます。ここで「型」は、身体と脳を持った「自分」と言えます。そして「練り粉」は、外部の食べ物、外部の刺激、環境などといった「自分の周り」に例えられます。この「自分の周り」(食べ物、刺激、環境)が自分(身体、脳)に入り込んで作り出すのが「記憶」です。「記憶」が最初からあるのではなく、「自分」と「自分」に入り込んだ「自分の周り」との相互作用によって記憶が作られるということです。だから、「自分」と「自分の周り」が変化すれば、記憶も変わることがあるということです。「型」と「練り粉」によって「たい焼き」の形が歪むこともあり、味も変わることもあるのです。

これが「記憶」に対する仏教の解釈です。仏教はこのような解釈に続いて次のように助言しています。「記憶」がまるで変わらない絶対的なものであるかのように、記憶がまるで自分のすべてであるかのように執着してはいけません。つまり、喜びや栄光の記憶であれ、悲しみや傷あとの記憶であれ、無意識・トラウマ的記憶であれ、過去の記憶に執着して生きてはいけないということです。

そして、「記憶」より重要なのは、変化する「自分」と「自分の周り」であるということです。過去の記憶への執着を捨てることによって人は「安らぎ」を得る、と仏教は説きます。

一方、聖書、キリスト教の聖霊の歴史はもっと大胆な解釈、証言をします。変化する「自分」と「自分の周り」を神様のお導きと理解し、それを喜びをもって大切に受け止めることが真の「やすらぎ」を得ることになると証言しています。自分の記憶を絶対化して得る「やすらぎ」、自分の記憶を再確認して得る一時的な「やすらぎ」とは異なる「やすらぎ」なのです。そしてそれは、執着を捨てるだけでなく、変化する「自分」と「自分の周り」を神様のお導きとして、感謝して受け入れることによって得られる「信仰による安らぎ」なのです。

変化する「自分」と「自分の周り」を恵みと感謝で大切に受け入れる、勇気ある「信仰によるやすらぎ」が真の「やすらぎ」だと、さらにはそれが愛だと聖書、キリスト教の聖霊の歴史は証言しています。

福岡聖パウロ教会のすべての教友の方々、またご家族が、「信仰による真のやすらぎ」を得られることをお祈りします。